

人間社会学部

# 奨学生入学試験問題

## 国語

注 意

- ① 試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開かないこと。
- ② 問題冊子に落丁、乱丁があった場合は、試験監督者に申し出ること。
- ③ 試験監督者が試験開始の指示をしたら、ただちに解答用紙の所定欄に、受験番号を記入し、マークすること。
- ④ 解答は全て解答用紙に記入すること。
- ⑤ マーク式解答欄および裏面の記述式解答欄の指定された箇所以外は使用しないこと。
- ⑥ 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

注意 解答はすべて各問の下端の  内に指示された解答欄にマークまたは記入すること。なお、解答欄のうち、この試験で使うのは、マーク式解答欄の  1  14、記述式解答欄の  A  J のみである。

問題一 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

卒業論文を書く学生が相談にくる。というより、何とかしてほしい、とすがってくるのである。

何を書くも自由、となっているのに、何を書いたらいいのか、わからない。何を書けばいいのか、教えてほしい、と言ってくる。こうしなさい、と命じられると、反発して、そんなことしたくない、とごねるくせに、ゴズイイ<sup>1</sup>にどうぞ、とやられると、とたんに、途方<sup>2</sup>にくれる。皮肉なものだ。

毎年のように、わたくしは何を書けばいいのでしょうか？ といってあらわれる学生と付き合っているうちに、自分でテーマをつかむ方法のようなものを教えなくてはなるまいと考えるようになった。

論文のテーマを他人からあてがわれては、自分の論文とはいえない。それでは、自分でテーマを設定するにはどうしたらいいか。

それを思い切って教室で、学生に話したことがある。そのうちに、そういうことをするのが気恥しくなったこともあって、やがてやめてしまった。ここでは、もう一度、恥をさらすのを覚悟で、カリユウ<sup>3</sup>のテーマの絞り方<sup>4</sup>をヒロウしてみる。かつて学生に話したのも、これと大同小異である。

文学研究ならば、まず、作品を読む。評論や批評から入って行くと、他人の先入主にとらわれてものを見るようになる。

読んでいくと、感心するところ、違和感をいだくところ、わからない部分などが出てくる。これを書き抜く。くりかえし心打たれるところがあれば、それは重要である。わからない謎のような箇所が再三あらわれれば、それも注意を要する。

こういう部分が、素材である。ただ、これだけではどうにもならない。ビールをつくるのに、麦がいくらかたくさんあっても、それだけではビールはできないと同じことである。これに、ちょっとしたアイデア、ヒントがほしい。それは作品の中に求めるわけには行かないが、どこときまつているわけでもない。ときには週刊誌を読んでいても、参考になることにぶつかることがある。他人と雑談していて、思いもかけないヒントが浮んでくることもある。読書、テレビ、新聞など、どこにどういのおもしろいアイデアがひそんでいるか知れない。

このヒント、アイデアがビール作りなら醸酵素<sup>はつこう</sup>に当る。学生で、ただ作品をこつこつ読んでいるだけという勉強家がいるが、これではいつまでたっても、テーマはできない。論文も生れない。

アルコールに変化させるきっかけになるものを加えてやる必要がある。これは素材の麦と同類のものではないけない。異質などところからもつてくるのである。

大きな発見が、ときに、靈感によってなしとげられるように伝えられるのも、この酵

素が思いもかけないところから得られたのを第三者が驚異をもってながめるときの印象であろう。テーマ、おもしろいテーマを得るには、このヒントが秀抜でないといけないが、それが、なかなか思ったところにころがっていないから苦勞する。

しかし、いくら苦勞でも、酵素を加えなくては麦はアルコールになつてくれない。

〔a〕、アイディアと素材さえあれば、すぐ醸酵するか、ビールができるのか、という、そうではない。

これをしばらくそっとしておく必要がある。『寝させる』のである。ここで素材と酵素の化学反応が進行する。どんなにいい素材といかにすぐれた酵素とが揃っていても、いっしょにしたらすぐアルコールになるということはあり得ない。

頭の中の醸造<sup>5</sup>所で、時間をかける。あまり騒ぎ立ててはいけない。しばらく忘れるのである。『見つめるナベは煮えない』。

ここでひとつ、具体的な事例をあげよう。これは、十数年前に、わたくしが、異本論という考えをもったときのことである。

シェイクスピアというような世界的大文豪でさえも、在世中から、そうであったわけではない。亡くなった直後からすでに偉大だと見られてはいたが、なお、神格化はされていなかった。それから傾向としてはすこしずつ評価は上昇しているが、それでも、時代によって、小さな浮沈はある。

こういうことはシェイクスピアに限ることではない。源氏物語だつて似たことが起っている。どうして、作品は変わらないのに、評価が浮動するのか。こういう疑問をもつようになった。これがビールの麦<sup>ウ</sup>である。

しばらく、扱いかねていたが、あるとき、諸説紛々の解釈のある文章や詩歌の意味はその諸説のうちのひとつではなくて、諸説のすべてを含んだものではないかと言っている批評家（ウィリアム・エンプソン）を見つけた。人間はめいめい自分の解釈をつくらうとしている。つくらずにはいられない存在であるらしい。

それとほぼ時を同じくして、デマがどうして伝播していくかという心理に興味をもつた。ここでも、尾ヒレをつけずに話を右から左へ移すことはできない本能が人間にはあるのではないかと考えた。

この二つがヒントになった。酵素である。素材といっしょにして、どれくらいか、はっきり記憶していないけれども、二年か三年はそっとしておいたら、人間は、正本に対して、つねに異本をつくらうとする。Aのものを読んで、理解したとする。その結果は決してAではなく、A、つまり異本になっている。文学がおもしろいのはこの異本を許容しているからである。六法全書を読んでも、〔b〕（法律でも、解釈をめぐる議論があるのは、異本がまったくないわけではないことを物語っている）。

そうして、「異本論」というエッセイを書いた。わたくしにとってのひとつのビールだったのである。

こういうビール作りになぞらえた論文のテーマの話をする、学生が質問する。

〔c〕、というのである。

これが一律には行かないところが、ビール作りとは違うところで、ビールは一定の時間寝させておけばいいが、頭のアルコール作りは、ひとによって、また、同じ人間でも、場合によって、醸酵までに要する時間が違っている。

しかし、もうよろしい、醗酵が始まったとなれば、それを見すごすことは、まずないから安心してよい。自然に、頭の中で動き出す。おりにふれて思い出される。それを考えていると胸がわくわくしてきて、心楽しくなる。そうなればすでにアルコールの醗酵作用があらわれているのである。

(外山滋比古 『思考の整理学』)

問1 傍線部1、3、4のカタカナを漢字に直し、傍線部2、5の漢字のよみをひらがなで、それぞれ記述式解答欄に記入しなさい。

1  2  3  4  5

問2 傍線部ア「これだけではどうにもならない」理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 文学研究は、評論や批評から入ると他人の先入主にとらわれるから。
- ② ビールは麦だけではできないから。
- ③ 作品を読むだけでは勉強にしかないから。
- ④ 素材に加えられるアイデアやヒントが必要であるから。

問3 傍線部イ「苦勞する」と筆者が考える理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① ヒントが秀抜でないといけないから。
- ② おもしろいテーマがないから。
- ③ 良いヒントが簡単には得られないから。
- ④ 大きな発見が得られないから。

問4 空欄  に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① それでは
- ② だから
- ③ しかし
- ④ なぜなら

問5 傍線部ウ「麦」とは、ここでは何を指すか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① シェイクスピアは、亡くなった直後からその偉大さが認識されたこと
- ② 源氏物語にも同じようなことが起ったことに疑問をもったこと
- ③ 時間が経つにつれて評価が上昇すること
- ④ 同じ作品でも評価が変化すること

問6 空欄  に当てはまる文として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 小説のようにおもしろいのは、法律でも異本を認めているためだ
- ② 小説のようにおもしろいのは、法律では異本をすこし許容しているためだ
- ③ 小説のようにおもしろくないのは、法律では異本をほんのすこししか許さないためだ

④ 小説のようにおもしろくないのは、法律では異本をまったく認めないためだ

問7 空欄  に当てはまる文として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 論文のテーマはどうやって決めるのか
- ② どれくらい時間をかけてテーマを選ぶべきか
- ③ どれくらい寝させておけば醸酵するのか
- ④ 醸酵させるにはどうしたら良いのか

問8 本文のタイトルとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 卒業論文の書き方
- ② 麦と酵素
- ③ 卒業論文のテーマ
- ④ 醸酵

問題二 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

朝、通勤、通学のため、自宅から駅へ。両耳にはイヤホン、流行りのポップスが頭に響き渡る。いつもの地下鉄に乗り込む。携帯の小さい画面に目を凝らす。おもむろに親指をキーボードに走らせる。あるいは昼食、フォークにパスタを絡めつつ、目と耳は、テレビの映像と音声に釘付け。

朝、イヤホンを耳から外す。深くゆったり呼吸し、歩を進める。と、朝日のきらめきが、木々の緑が、鳥のさえずりが、いつもよりひと際鮮やかに感じられないだろうか。地下鉄の中、携帯を取り出す代わりに、目を閉じる。しばし、吸う息吐く息に集中すると、シツソウする車両が地下道に響き渡らせる轟音に、微妙な音色・リズム・強弱があり、都市の奥深い闇が奏<sup>2</sup>でる交響曲のように聴こえないだろうか。昼食時、テレビを見る代わりに、パスタを食べることそのものに心を集める。と、パスタがソースに絡む複雑な味わいが、食材それぞれの滋味が、ひととき豊かに深く広がらないだろうか。

私たちの生活、感覚は、刻一刻、膨大な情報・イメージに覆われている。覆われ方があまりに全面的であるため、それに気づかないほど。ある意味で、それらの情報・イメージは、私たちの生活、感覚を「豊か」にしている。が、それらはあまりに多く、あまりに遍く覆っているため、さすがの私たちも時に、こうした状況そのものに疲れ果て、すべてを投げ出したくならないだろうか。

私<sup>ア</sup>がこれから語る瞑想<sup>ブ</sup>は、そうした情報・イメージが覆い尽くす生活、感覚に一陣の風を吹き込み、情報やイメージの霧を晴らし、世界を改めて鮮やかに感じさせる技<sup>カ</sup>といえよう。

瞑想というと、何やら神秘的な、日常からかけ離れた禅寺や僧院などで営まれる禁欲的な修行と考えがちだ。事実、そうした瞑想もある。が、私がこれから語りたい瞑想は、私たち「世俗」に生きる者たちが日々の生活を送りながら、「日常」の一瞬一瞬を非日常的目覚めへと変えていく技——歩き慣れた道を歩く、乗り慣れた電車に乗る、食べ慣れた食べ物を食べること一瞬一瞬に、<sup>シ</sup>今、ここ<sup>ク</sup>でしか味わえない生きることの豊かさ、驚きを再発見する技のことだ。生きることそのものの技、art of living。

「アート」——これまた日常から遠く、美術館、コンサートホールでオゴソ<sup>3</sup>かに拝見・拝聴しなくてはならないものと思いがち。が、<sup>シ</sup>art of living<sup>ク</sup>はそうでなく、日々、一瞬一瞬生きることに、ほんの少しの工夫<sup>シ</sup>≡<sup>ク</sup>をすることによって、生きることそのものをより鮮やかに、より妙なるものに、より悦びに満ちたものに変容させていく技である。

ほんの少しの工夫<sup>シ</sup>≡<sup>ク</sup>の中心、それは、呼吸、息を吸い吐くことだ。ふだん意識することなく自動的に行っている呼吸を、少しゆっくり少し深く味わいながら行うことにより、呼吸のみならず、身体を感じ方、心の在り様、世界の認知の仕方まで変わっていく。不思議な体験だ。今までなぜこんなことに気づかなかつたのだろうと怪訝<sup>4</sup>に思うほど身近なことでありながら、生きることの風景を鮮やかに変えてしま<sup>ウ</sup>、そんな<sup>シ</sup>秘技<sup>ク</sup>でもある。

私も、この身近な秘技に気づき、意識的に行い始めたのは、最近だ。5、6年前からだろうか。この技に興味を持ち始めた私は、その後、さらに深く知るため、京都の山奥

で坐り、フランスの片田舎で食べ、スイスの湖畔で歩き、インドの街角で嗅ぎ、東京の自宅で寝た。呼吸を味わいつつ、坐ること、食べること、歩くこと、嗅ぐこと、寝ることそのものの豊饒さと深密さを堪能した。これから語る体験とシサクは、私自身のそうしたささやかな art of living の軌跡に他ならない。

人は問うだろう——とは言っても、瞑想という身近な秘技、世界の、生きることの、鮮やかな変容の技は、少ないながら5、6年「修行」した者だからこそ、発揮できるのではないかと？ a 瞑想の経験など皆無だった者でも、ほんの少しの工夫 ＝ art をすることで、世界の認知、生きることの在り様を、鮮やかに変えてしまうのだ。

授業の学生たちに、「歩くメディテーション」を行ってもらおう。通い慣れた通学路をただ歩いてもらう。「普通に」歩くと、「平凡な」街道と「平凡な」住宅街を通る10分ほどの道。ただ、いくつかの工夫をするように言った。「1 深い呼吸を何回か行う。自然な呼吸に戻し、呼吸に心を集めつつ、落ち着ける。2 歩いていることそのものに集中する（心が逸れたら、再び呼吸に心を集める）。3 体全体で、五感を全開にして感じ取る。4 自分のペースでゆっくりと歩く」。

こうして、学生たちは最寄り駅（東急東横線日吉駅）から大学のキャンパス（理工学部矢上キャンパス）まで歩いた。何人かの感想だ（傍点筆者）。

「いつも通っている同じ道でも、時間によつて風景は大きく異なるし、その日の気温や湿度、周りにいる人間も変化します。ですから、同じ、同じ、同じ、これは絶対にありません。そして、小さな変化でも、一つ一つ感じると、心地よかつたり、面白かつたりと、日吉―矢上間の道は楽しいものであると感じることができたのです。『駅から学校まで無駄に遠くて嫌だ』という認識を変えることができました」。

「晴れの日の朝と雨の日の夜で二回瞑想をして歩いた。まず朝の道では、太陽を全身に浴びているような感じがした。頭のとっぺんからつま先まで太陽を受けている気がして、太陽の存在を改めて大きく感じた。次に車が近づいて遠ざかる音が、波の寄せては返す音のように聞こえ、とても心地よかつた（ただしバイクや電車はうるさかつた）。夜の道では普段意識していない音を感じる事ができた。例えば、足が地面に着くとき、の音、鳥の鳴き声、下水道を流れる水の音など、普段は静かだと感じていた帰り道でも、こんなにたくさんの種類の音があつたのだと分かつて驚いた。また光に閃いても似たような感想をもち、光には白色の車のライトや黄色の街灯の明かり、緑や青色の看板の明かりなどいろいろ色があり、夜の街がたくさんの光で照らされていることを知つて、帰り道が楽しくなつた」。

「まず雨の日の朝に瞑想した時は、傘で覆われているため世界が閉じているように感じられた。b 視覚が制限されているため、聴覚と嗅覚の方が鋭くなつた。聴覚的には、傘に雨粒が当たる音が良く聞こえ、その奥に車や電車の音が聞こえた。〔中略〕また、雨粒が当たる音は一定ではなく、大きな音や小さな音が混ざり合つていてリズムもバラバラであり、聞いていて飽きなかつた。c 嗅覚的には、思つていたよりも雨の匂いを感じなかつた。d 矢上の坂道に差し掛かると、草や木の匂いを強く感じ心地よかつた。今まで毎日のように歩いてきたが、この時ほど草や木の匂いを感じたことがなく、非常に驚いた」。

この、音、光、匂いの豊かさ、「驚き」、「楽しさ」を、彼らは、数年間毎日のように

通うなか、初めて、味わった。事前に長期の修行をしたわけではない。簡単な指示に従っただけだ。

最後の学生は、さらに続ける。「続いて、晴れた日の夕方に瞑想した。矢上の下り坂がとても気持ち良く、夕日の光が優しく包み込んでくれるような気がした。また、風で葉がこすれる音が聞こえ、草や木の香りもした。「中略」また、空を見上げると線状の雲が重なり合っていてきれいだっただが、電線が多く不快に感じた。普段は電線はほとんど気にならないため、無意識に電線を排除して空を見ていることに気がついた。[e]そのまま東急のスーパーに入ったところ、商品・人・音楽などさまざまな情報が一度に入ってきたため、一瞬で非常に疲れた。そしてこのような場所を特に疲れることもなく当たり前のように歩いていた自分<sup>エト</sup>に驚いた<sup>イタ</sup>」。

この非常なる「疲れ」がもはや疲れとすら感じられない、そんな異常な(?)環境にこそ、私たちは日々身を晒している。それほどまで、情報は「第二の自然」として、私たちの心に、体に滲み渡っている。刻一刻疲弊させている。手遅れだろうか。いや、そこにこそ、瞑想の秘められた力が、一陣の風のように、情報の分厚い霧を吹きはらす。学生たちが証すように。

(熊倉敬聡 『汎瞑想——もう一つの生活、もう一つの文明へ』)

問1 傍線部1、3、5のカタカナを漢字に直し、傍線部2、4の漢字のよみをひらがなで、それぞれ記述式解答欄に記入しなさい。

1 [F]                      2 [G]                      3 [H]                      4 [I]                      5 [J]

問2 傍線ア「私がこれから語る瞑想」とは何か。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

[8]

- ① 日常からかけ離れた場所で気持ちを落ち着けること
- ② 日々、一瞬一瞬生きることに意識を集中すること
- ③ 意識的な呼吸によって生きること味わうこと
- ④ 通い慣れた道をゆっくりと歩くこと

問3 空欄 [a] に当てはまる文として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

[9]

- ① そうかもしれない。
- ② いや、そんなことはない。
- ③ その質問は無意味である。
- ④ その通りである。だからこそ、



問4 傍線部イ「何人かの感想」に共通する内容として最も適当でないものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 10

- ① 普段気づかない小さな変化に気づいた。
- ② 歩き慣れた道が新鮮に感じられた。
- ③ 人工的なものが不快に感じられた。
- ④ 感覚が鋭くなった。

問5 傍線部ウ「駅から学校まで無駄に遠くて嫌だ」という認識はどのように変わったか。最も適当でないものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 11

- ① 短く感じられる
- ② 楽しく感じられる
- ③ 変化に富んでいる
- ④ 単調でなく心地良い

問6 空欄 b、c、d、e に当てはまる語の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 12

- ① b 一方 c また d さらに e しかし
- ② b また c 一方 d しかし e さらに
- ③ b また c しかし d さらに e 一方
- ④ b 一方 c しかし d また e さらに

問7 傍線部エ「自分に驚いた」理由として最も適当でないものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 13

- ① 自分がさまざまな情報を無意識に排除していたことに気づいたから。
- ② 自分がさまざまな情報に晒されていたことに気づいたから。
- ③ いつもとは違う物の感じ方することで普段の自分を客観視したから。
- ④ これまで草や木の香りの心地良さに気づかなかったから。

問8 本文の趣旨に最も合致するものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 14

- ① 私たちが膨大な情報・イメージに浸って生きていることに気づくことが生活を豊かにする。
- ② 日常生活の中にこそ、生きることそのものの意味が隠されている。
- ③ 瞑想は、情報に晒されて疲弊してしまっている現代人の生活に新鮮な気づきをもたらしてくれる。
- ④ 都会の生活に思わぬ自然の営みの妙を発見することが瞑想の醍醐味である。

(以上)